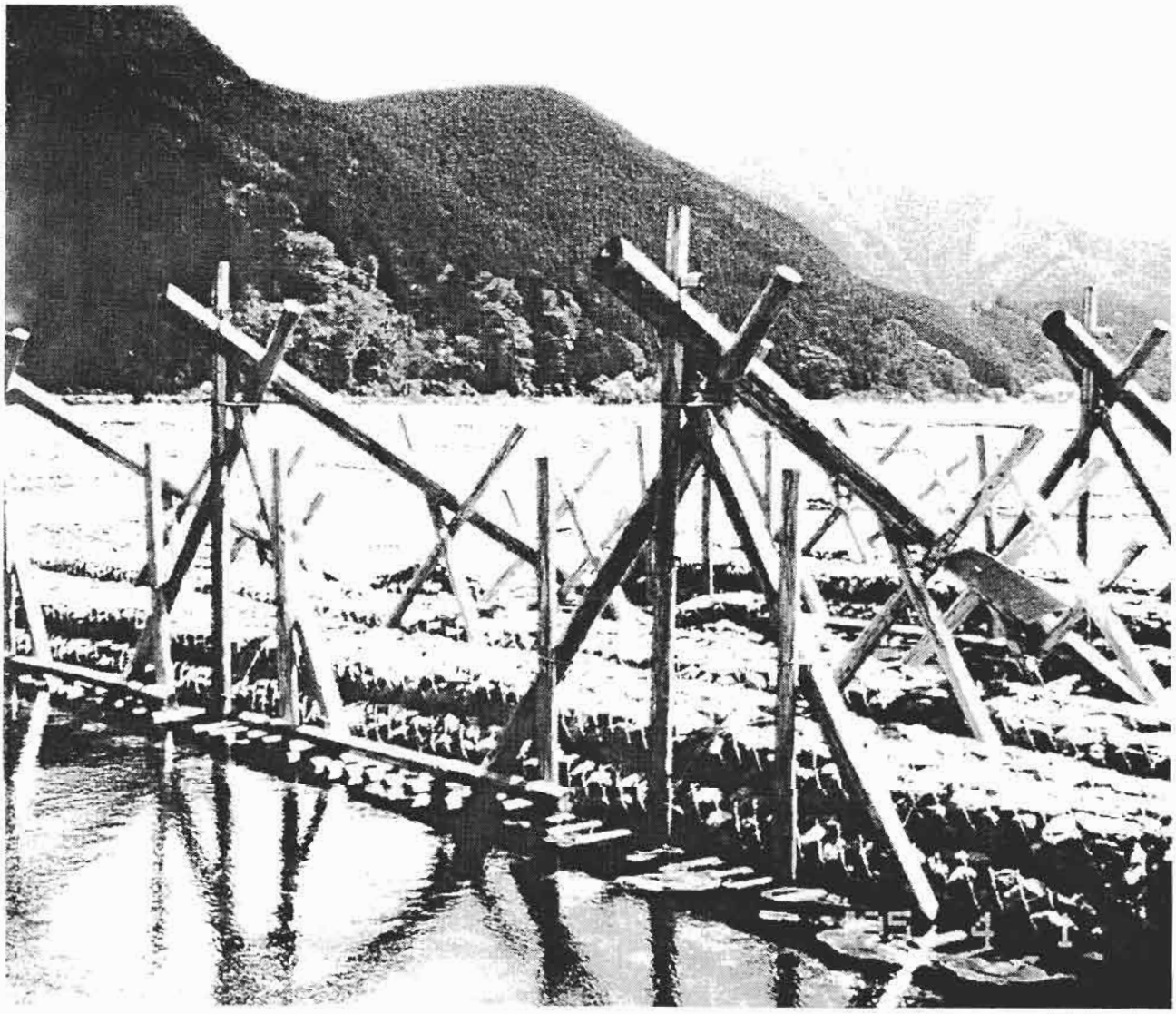
中川根ふる里通信

＝第37号＝

編集・発行・モアラブ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
中川根ふる里通信係
TEL.0547-56-0015
郵便振替口座 00870-4-81556



川上に向かい濁流と戦う　10ページ参照
〝大聖牛〟が高郷地区前に鎮座。

セミナーハウス 南麓館

静岡県立川根高等学校

新設されました。

県立川根高等学校にセミナーハウスが建設されました。新学期が始まって一段落した四月下旬、川根高校におじゃまして、セミナーハウスを見学させていただきました。

校長先生と教頭先生にご案内され、いろいろ細部に渡って見せていただき、又、丁寧に説明して下さいました。

校長先生は、今春赴任されました地元の(地名地区)宮下浩之先生、(写真の方)教頭先生は十何年か以前、英語を教えられた高杉幸介先生です。

旧徳山中学校運動場、そして川根高校テニスコート上に建てられた外見洋風な二階建、一部屋上有、内部は木の香ただよう、新床の香もすがすがしいセミナーハウス〝南麓館〟をご紹介致します。

普通、高等学校のセミナーハウスというと、寄付金や建設の為の長年に渡る積立金をもとに、建設されておりますが、南麓館は、全額県費(一部国費もあると聞きました)で賄われた、県内高校第一号であることも特徴の一つです。

◎建設の趣旨は

人間としての在り方生き方に関する教育を重視し、心豊かな生徒の育成を図るため、クラブ活動やホームルーム活動等の特別活動及び、他校や地域との交流にも対応できる場として、広く教育文化活動を推進する為です。

◎期待される教育効果として

○日常の学習活動や宿泊を伴う研修や活動をとおして、生徒どおし及び生徒と教師の人間関係を深め、教育

の効果を高めることができる。

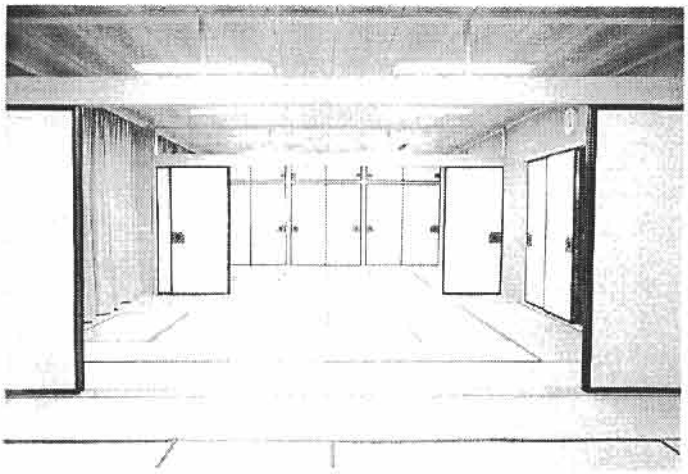
(2) ホームルーム活動・クラブ活動・生徒会活動等の特別活動をとおして、心豊かな生徒の育成や人間らしての在り方生き方教育を推進することができる。

(3) 他校生徒や地域との交流をとおして、幅広い視野と新しい人間関係を築くことができ、活力ある学校づくりを推進することができる。

(4) 郷土の伝統・文化の伝承・普及及び啓蒙活動の場として利用することにより、地域に根ざした新しい文化の創造に取り組むことができる。

(5) 公開講座の開催や、地域交流諸活動をとおして、地域の教育力を高めるとともに、地域住民の学校理解を深めることができる。

(6) PTA、同窓会等の活動の場とすることができる。



和室宿泊研修室

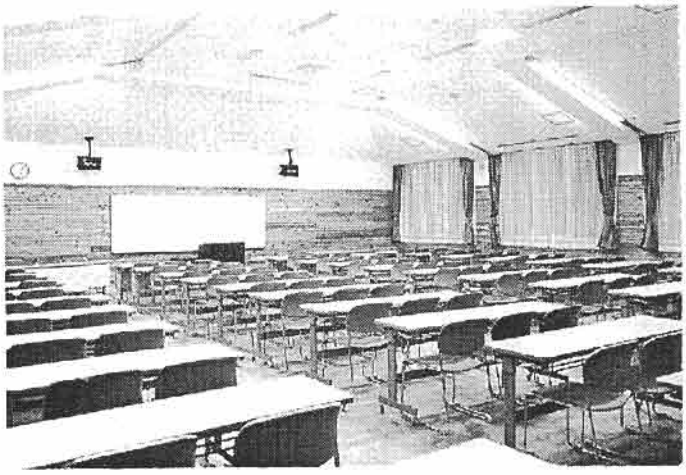
建設の経緯

平成4年度	県議会で建設を決定する（本県第1号）
平成6年1月	建設工事の安全祈願祭を挙行
平成6年10月	竣工・引渡し
平成7年1月	静岡県立川根高等学校セミナーハウス「南麓館」と命名し、落成式を挙行。

南麓館の由来

南アルプスの南面、即ち「南麓」に位置していることに加えて、温暖で明るく、豊かな心と明日への夢・希望・発展を感じさせるとともに、「南アルプスのように大きく逞しくあれ」という願いを込めて命名されました。

洋室研修室



余録

昭和三十八年に新設された川根高校も早三十余年の歴史を重ね、卒業生の数も五千人をこえました。川根地区の役場や、会社など、働きざかりの四十代を頂点に、職場の人員のほとんどが川高卒業生となっていることからも、地域に根付いた学校と言えると思います。

とは申しましても、同地区は、人口減少、高齢社会と言う悩みをかかえ、ここ三年位の地区中学校卒業生の数が急減し、今春の入学者は一六二人定員の中一〇六人となっております。今後も地域生徒数が増える状態ではないと聞きますが、地区教育の拠点として、将来も、地区全体で盛り上げて行かなければならないと考えます。

ふるさと探検
徳山の盆踊り「狂言」のこと

寺田　力（徳山在住）

中川根町徳山（旧志太郡塩之内村）に伝わり、毎年浅間神社にて八月十五日に行われる「盆踊り」は、鹿之舞・ヒーヤイ踊りと狂言から成り立ち、国の無形民俗文化財に指定されています。そして、徳山の人々と有志によって古典芸能保存会がつくられて、その会費で維持されてきました。

狂言は全部で十四番、そのうち能の一部を流用した「頼光」「曽我」と歌舞伎風の「家番」を除く残りの十番は、現在各流で上演されている狂言と同趣同根のものです。その十番と現行狂言との曲名とは次表のようになります。

現行狂言	徳山の盆踊り狂言
松楪葉（ゆずりは）	百姓狂言
花盗人	花折狂言
釣狐	こんかい
音曲聟	ぎんじ（源氏）
富士松	富士松
昆布売	こんぶ売
萩大名	萩大名
連歌十徳	こくうり
地蔵舞	笠寺
鞍馬参	千夜房

さらに、ヒーヤイ踊り歌にも、狂言の歌謡からとったものがあります。踊歌「花おり」は「花折狂言」のなかの謡曲「二人静」と「熊野」からのものですし、「こくうり哥」は狂言「こくうり」（連歌十徳）、「地蔵舞哥」は狂言「笠寺」からのものです。

ひろく知られている徳山の盆踊り

徳山の盆踊り狂言は、「地方に残る民俗芸能」として広く紹介されていますが、主なものをあげるだけでも

・駿河徳山盆踊詞章　山路興造解題・校注
（日本庶民文化史料集成第四　狂言所収）
・風流に伴う狂言「塩之内狂言」本田安次著（「能」一九五二）
・静岡県芸能史　田中閑雄著　一九五一
・地方狂言の研究　宮尾しげお著　一九七七

などがあり、その他種々の書物や研究書にも引用されています。

徳山の盆踊り狂言の特徴

徳山に伝えられている十番の狂言の特徴の一つは、現行狂言にくらべて、現実の社会・生活問題をリアルに、風刺をきかせ、滑稽さにくるんで芸能化した形成・流動期（十四～十六世紀）の狂言の面影を留めていることです。いま一つは、塩之内村を中心として川根地方の歴史と生活に融けこんでいることです。

中世の面影を残す徳山狂言

「百姓狂言」に登場する二人の農民は「背の高い（低い）男なれば、天を笠に着まして、きミすを供に連れ、鼻先の向いたる方へ ぬんぬと参ります。」と言って、頑健な体を誇らしげに街道の真ん中を胸をはって進んで行きます。

そして、田中で「今年より国代宮も譲り得て 殿も徳若民も福若」という和歌を詠います。誰が誰に「国代宮」を譲ったのか、「国代宮」を譲るとどうして民が「福若」になるのかと、この和歌の意味するところを考えると、NHKの「花の乱」での「山城惣国」の農民の姿が浮かんできます。

「風雅でやさしく心愛しい」「花折狂言」には、現行の「花盗人」にはない「佳句麗藻の集」とされる和漢朗詠集の漢詩や和歌、「閑吟集」のなかの流行歌が ふんだんに ちりばめられています。

一例をあげますと、和漢朗詠集の漢詩

「花明上苑　軽軒馳九陌之塵、猿叫空山　斜月瑩千巖之路」（花　閑賦）と　和歌

「見てのみや　人にかたらむ山ざくら　手ごとに折りて　家づとにせむ」（花　素性法師）が

「花しやうゑんにあきらかにして　ゑひけんきゆうはくのちりをはき　なねつせんくわんみちをみがき　さるこふざんにさがんで　みてのミや人にかたらん山桜　てごとにおりても　おりずてにせん」

と一つづきの形で謡われています。また、「閑吟集」の「文は遣りたし　詮方なし　通ふ心の物を言へかし」の流れをくむ小歌が「花は折りたし　梶や木は高し　とヤイ　はなれがたなの　サテ　はなれがたなの木のもとや」となって現れています。

川根地方の歴史と生活を映して

川根地方に融けこんでいる姿としては、第一に川根地方の生活と歴史が、あちこちに顔を出していることです。「上野の寺」（花折狂言）は寛永寺のことでしょうが、寛永寺は一六二五年に開かれており、この頃川根地方は徳川幕府の直轄地で代官の支配下にあったこと、経済圏としては駿府を通じて江戸と交渉があったことから、現行狂言「花盗人」や「花折り」が京都の寺や神社を舞台としているのとは違って、江戸の上野の寺と桜に変えたのでしょう。

「笠寺」のなかで地蔵坊が読むお経「なむからたんのうとうらあやあ」は、曹洞宗の「大悲心陀羅尼経」のもので、現行狂言「地蔵舞」での浄土宗の「善導の往生

札諸偈」とは異なっています。これは十五世紀末に上長尾の智満寺をはじめ川根地方の寺が曹洞宗になり、川根地方の人々が、その檀徒になったことによるものでしょう。

「こんかい」に登場する狐も、現行狂言「釣狐」にでてくる「妲妃、褒姒、玉藻の前」に化けた妖怪変化じみた狐ではなくて、「中川根ふる里通信 第三十五号」の「ふるさと夜話」に出てくる、狐が人をだましたのか、人が狐をだましたのか、人をたましたのか、がよくわからない程の憎めない小動物として扱われています。

その他「若狭小浜の昆布」(昆布売)が「北国玉婦ヲ松前よりのこんぶ」に、「笠寺」での酒が「下り諸白」になっているのも、この地方の人々の食生活を反映しています。

また、川根地方の方言「みるい」、「只今のがは、身どものがは」「すべこべ〳〵」「たいげ」などが随所に使われていることとあわせて、川根地方をふくむ農村の人々の間での素朴で明るい笑いを誘う表現も、あちらこちらに姿を見せています。

「きミすを供に連れ」「いかい若衆好きにて候」(花折狂言)、「久米の仙人が萩の白きを見て通を失った」(萩大名)という詞章や「尼寺の鐘の撞木は生木なり 押す度毎に汁がじく〳〵」(富士松)などの和歌は、近世に入って江戸幕府の式典化した「狂言」にはみられないもので、廃曲されてしまった狂言「つらとき」を思わせるものでもあります。

徳山の盆踊り狂言について、保存会会長の長濱寛次郎氏は次のように記っていますが、適評といってい

いでいます。

「狂言が能とともに舞台芸能として大成される以前の堀之内村の土地に根づいた形成期の狂言の面影を色濃く残している。幕府や武家の式楽や各種の狂言流派に見られない、堀之内村の人々の生活と歴史を刻み、六百余年にわたって伝承されてきたのである。」

出版物紹介

人間選書一八四

「いなかに移り住むということ」

著者　寺田瑛子さん　徳山在住

発行所「社団法人」農山漁村文化協会

定価　一七〇〇円

「おかしいな。どこかで見たような景色だ。何十年も離れていた家に帰ってきたような気がする」

たしかにどこかで見た景色であった。たぶんそれは先祖をたどれば　どちらも百姓に行き着く　私たち夫婦の原風景であったのだろうか。

まあこんなふうにして　たどりついた私たちの「ふるさと」であったが、これがまた思いもよらぬ不思議の国であった。……

寺田さん一家は二年半ほど前に徳山へ移り住んで来たいわゆる「Iターン人」で、中川根町では希なケースの住民と言えます。前ページ徳山の盆踊り・狂言を寄稿いただいたのが瑛子さんの夫君でいらっしゃいます。

長い間都会の生活をして来た方から映る　ふる里の様子、風俗、習慣、新鮮さ、とまどい、不便なこと　などなど生きいきと描かれていて、地区の住民にとっては興味津津、ふる里をはなれている方々にとっては（特に徳山出身の方）ため息が出るほど懐しい思いに、ひたることが出来ます。全国書店にて扱っております。

問い合わせ先　〒107

東京都港区赤坂七丁目六ノ一

社団法人　農山漁村文化協会

TEL　〇三ー三五八五ー一一四一

余録

寺田さんを知ったのは　徳山へ住まれてすぐだったと思います。「犬がほしい」と、私方へ訪ねてこられました。未だ子供が産まれていない　母犬をすっかり気に入られて子供が産まれるのを待ちわびていらっしゃいました。期待にそえて　四匹中一匹寺田家へ嫁いで行かせた、と言う縁で結ばれております。

それにしても、徳山の盆踊りの内、狂言につきましては　鹿ン舞、ヒーヤイ踊りの方が有名で、陰にかくれている様な存在に　地元でも考えられている様に思われてなりませんでしたが、寺田さんの探求心から、特徴や、歴史背景まで　ご紹介いただけて　徳山の盆踊りへの知識が増しました。

かつて、徳山の盆踊りが県指定無形文化財となる時、「鹿ン舞・ヒーヤイ踊りだけでは　指定にはならなかった、狂言も含め三点セットでなければ駄目」との話を聞いたことがあります。狂言の深さ、歴史を知って　改めて、その意味を感じる次第ではありますが。

八月十五日夜　幾百年の幾万人の人々によって興じられ引き継がれて来た狂言も　鹿ン舞も、ヒーヤイ踊りも、案外大意も知らず、ただひたすらに、語り、舞い、踊って来たのかも知れませんね。

東京のかたすみから(10)

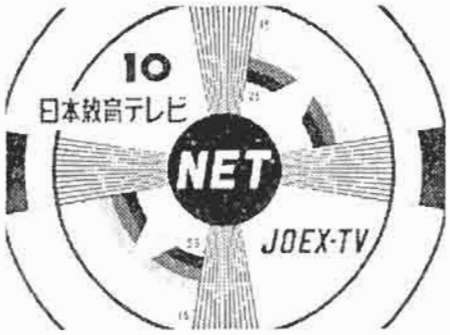
テレビの始めから終りまで

テストパターンとステテコ

渡邊實夫

毎朝、テレビの番組が始まる前に必ずと云っていい程、カラーバー（赤・緑・青・黄色などの帯状の縞）が映し出されるのを御存知の方も多いと思う。これは各家庭のテレビの色を例えば髪の毛が赤くなっていたり、雪が青く見えたりしないように、赤は赤、黒は黒、白は白に映っているかどうかをチェックするためのものである。これはカラーテレビになってからの話。

その昔、白黒テレビ時代は色の心配は無かったが、丸い顔が三角に見えないか、背丈が妙に縦長になっていないか、或は横に拡がっていないか、髪の毛の一本一本が見えるかどうか、白黒の濃淡が分るかどうかなど、被写体を忠実に再現する為にテストパターンと云う「物差」で、万能の模様図を考えたのである。医者で云えば聴診器、体温計、血圧計、顕微鏡などを一緒にしたようなものと考えて良いだろう。



テストパターン
テレビ朝日社史より

上の写真はテレビ朝日の前身の日本教育テレビ開局当初のものである。このテストパターンはテレビの初期においては、一般家庭のテレビ受像機が不安定と云うことがあって、朝の放送開始前には必ず調整用に放送したものであり、私達技術屋には、テレビの調子の良い悪いを診察する最高の道具としてなくてはならないものであった。

さて、開局当時は月々火水木金々の休みなし、連日連夜の徹夜作業、仮眠の連続で、テレビ放送設備の据付調整等の突貫作業が行われていた時のことである。公社としても社員の健康を気遣って、医務室でビタミン注射を無料でする体制をとっていた。

当時はまだテレビそのものが一般に普及しておらず、今のように放送が朝早くから夜遅くまで、しかもその間、めべつまくなし、と云うのではなく、放送開始時刻は午前九時三十分、というように放送は決まった時間だけという頃であった。

ある朝のこと、目を覚ました私は時計を見て驚いた。九時二十分である。「オーイ遅れるぞ、速く速く、大変だ大変だ。」と大声を残してステテコ一枚のまま、スリッパで土間へ飛び出し、一目散にテレビ局の玄関に向って走り出した。ちなみにその距離四ロメートル弱、小学校以来のマラソン選手であった私の面目躍如という所。途中路上で九時半出社組の総務局、経理局、営業局などの事務職の人達に会い、その間をかき分けかき分け突走った。エレベーターを待ちきれず、三階の主調整室（マスター）へ駆昇り、手当り次第に電源スイッチを投入した。

それから間もなくして仲間が、はあはあと息を切らして駆けつけ、テストパターン装置を調整して画をあてくれた。テストパターンを見た時は、これでなんとか

放送に間に合う見込みがつき、救われたと思い、本当に嬉しかった。

実はその前夜、いつものように翌日の機器の調整、放送素材の準備を夜中までかかってやり、仮眠に入る前に久し振りに材木町（今の六本木六丁目）通りへ出て、当時近くには一軒しかなかった飲屋で一杯飲んで　お互いに疲れをいやして、仮眠室である元料亭「吳服」の一室に帰り、気持ち良い眠りについた。暫くうとうとしたと思ったら女将（おかみ）が隣室ではたきをかけている音が聞こえて眼を開けると、雨戸のふし穴からまぶしいばかりの太陽光線が一……写真は私があわてふためいて走った道を読者に見ていただく為に今年の正月、六本木六丁目の現場へ行って撮影したものである。……

←テレビ朝日玄関
テレビ朝日社史より

係、鋭い光を差し込んでいた。隣りに寝ている仲間をみると、疲れ切った様子で幸せそうにぐっすり眠っていたのである。……

後になって、海軍兵学校を出て太平洋戦争の最先端で戦ってきたテレビ朝日の元副社長阿部三郎氏が、技術担当役員として就任された時、「人間五分あれば何でも出来るものだ。江田島の海兵時代、起床・着服・洗顔・歯磨きを済ませ、トイレへ行き、掃除をして食堂へ掛けつける迄を五分でやったものだ。」と挨拶され、「君達も、時間が足りないから仕事が出来ない、と云うな。」と叱咤激励されたものだが、あの時の自分の行動は将にそれだったとひとり頷いたものである。「五分しかないのではなく、未だ五分ある。」という先輩の五分論は今だに私の心にしみ込んでいる。

アナウンサーが朝寝坊して、アナウンス原稿を技術屋が代って読んだと云うことは、良く聞く話であるが、技術屋の場合はそうは行かない。技術屋が行って電気を入れなければ放送装置が働いてくれないのである。

テレビ局で何時も裏方の技術屋にも、やりがい、生き甲斐、プライドの持てることがあるものだ。開局の頃は俺達がやらなければ放送出来ないのだと云う自恃と又一億国民のための放送だなどの意気込みや誇りと使命感が充満していて、いろいろな修羅場をくぐり抜けられた。

その点、現在のようにコンピューター化、自動化されて、時間になれば一秒違えずきちんとコンピューターがやってくれ、コンピューターに技術屋が振り回されているのを見ると隔世の感がある。

話は戻るが、ずっと以前に、「天下の六本木を裸で走った」と云う武勇伝の持ち主だと云われたことがあるが、ステテコ一枚で走って放送開始に間に合ったと云う話を、入社の時新入社員はよく聞かれたらしく、最近、その話が今でも伝っているようを放送準備部素材担当副部長の篠原邦彦君から聞いて、事の大きさに驚いている。

後になって考えれば、ステテコ一枚の半裸での独走は、その後話題になった六本木のストリーカーのはしりであったのではないか？？？

又当時、テストパターン発生装置の光源からは特別高圧を使っているため、放射能が出て男性の生殖機能が破壊されると云う説があり、調整の時にみんなこわごわさわったものだ。テストパターンメーカー（池上通信機）から装置と抱き合せで入社した石山道隆君は設計製作者でないと、調整が難かしかったため、を始め関係者でお子供が出来過ぎて困ったと云う話は聞かない。

写真のテストパターンは、ご覧のように、「日本教育テレビ」のマークが入っている。「テレビ朝日」となっていないが、これは時の権力者田中角栄氏によって推進された新聞系列とテレビニュースネットワークの一本化統合で（日本テレビは読賣・TBSは毎日・フジはサンケイなど）社名が「テレビ朝日」に変更（昭和四十八年）される以前のものである。

この日本教育テレビのマーク入りのテストパターンは、現在視聴者の皆様が見ることの出来ない お蔵入りになっているものである。ちなみに、社名変更に要した費用は、当時の金で五億円近くと云われた。

一九九五年四月二十五日 記

大井川の様子が昔より大変かわりましたが、……

上長尾前から横がしまで、つい一昔まで、大井川が胃袋の形になっておりましたが、低水護岸を作って洪水の時水がまっすぐ流れる様な河川大改修が行なわれています。高柳前の低水護岸上には、ローラースケート場、ゲートボール場、ミニ球技場、グランドゴルフ場など出来上りつつあります。一段と低くなった大井川河床には、表紙、大聖牛（ウシ）や昔ながらの工方のモクショウなどが設置されています。水との戦いはテトラが勝つかウシが勝つか？出来ればウシに勝っていただきたいです。

ふるさと夜話

堀之内の逓送事件と後日談

原田　耕作

八十六年前の昔、明治四十二年十二月、旧徳山村堀之内郵便局の逓送係の青年が、何者かに殺されたいたましい事件があった。〝堀之内の郵便殺し〟と言って平和な川根を動転させた事件だった。

昭和六年十二月、大井川鉄道が開通して、郵便物の運送は鉄道で行われる様になったが、それ以前の郵便物は行嚢（郵袋）へ納めてそれを背負った逓送人がテクテクと歩いて要所の村に定められてある郵便物交換所と郵便局の間を一日一回往復したものである。

旧下川根村（現川根町）石風呂にも交換所があって、下川根村、笹間村、中川根村郵便局の郵便物交換が行われた。筆者がまだ学生の頃、下校の途中、上長尾郵便局の逓送係の青年が行嚢をショイコへ付けて、それを背負ってテクテク歩いて居るのに出逢ったものである。

堀之内郵便局の交換所は、千頭から安倍郡へ越す洗沢にあった。東川根村、上川根村（いずれも現本川根町）安倍郡清沢村、大川村（いずれも現静岡市）等の郵便物交換がここで行われた。事件は明治四十二年十二月二十一日に起きた。その日、午前四時、堀之内郵便局を出た逓送係の青年は、定刻午前六時を過ぎても洗沢の交換所へ姿を見せなかった。一体どうした事だろうと関係者は心配した。

堀之内局の逓送路は本城山の山腹を裏側へ出て山続きの高山の山腹へ移り、坂京辻を通り洗沢へ着く里程約十三キロ、あったに人影を見ることのない深山の道だった。

その日の郵便物の内には、三百四十円の大金がはいって居た。現在の三百四十円はチョット居酒屋へ入ればコップ酒一杯で消えてしまう額だが、当時は日雇労働者が二年働いても手に入れる事は困難な金額だったと云う。逓送人はその大金を持って逃走したかも知れない、との疑も出て警察は電報で手配したと言う。

しかし逓送の青年は十九歳、堀之内の模範青年だった。逓送人の身に必ず異変が起きたのだと、その夜十時まで逓送路附近の捜索をしたが判らなかった。翌早朝から大捜索を始めた。その結果、坂京辻から約三十メートル先の道下から郵便局の角燈が発見された。

角燈は提灯が普及しない前の物で、四方がガラスで内に手ランプまたはローソクを立てる様になって居た。提灯より明るく風雨に耐えて、提灯が普及してからも一般家庭で用いたものである。角燈の発見につづいて道下二十メートル程の雑木林の中から青年の無惨な死体が発見された。検死の結果、背後から二連発の猟銃で撃たれたという事が判った。坂京辻は堀之内局から約十キロの道程だった。

殺された逓送人は十九歳、鈴木留太郎と言う青年だった。生まれは榛田郡久努村、徳山村に寄

留一で七ヶ年、当時母親と二人の生活だった。留太郎は十五歳の時父親に死別、第二人があって赤貧洗うが如き家庭であったが、性格が素直で母に孝養、郵便局さも誠実一途、勉学心が強く模範青年として徳山村では木杯を贈って表彰する事前の事だったと言う。第二人は小学校を終えて奉公に出て当時母子二人の生活だった。母親の悲嘆は如何ばかりであったろう。

青年の非業の死は通送関係は勿論世間一般の深い同情に依って多額の香料が寄せられたが、余りにも気の毒な事件だった。尚残念でならない事は事件が迷宮入りとなった事だ。当時の警察は電話も無い、自転車すらも無かった。伝達も手配もすべて電報だけだった。容疑者は何人かあったと言う。然し当時はかかわり合いという事を非常に恐れて、警察への協力は全く無い時代であった。残念にも謎を秘めたまま時は流れてしまった。

この事件後、塩と内郵便局では気味の悪い本城山から高山の通送路をやめて小長井へ廻ることにした。然し、小長井廻りは距離が遠い。一年間小長井廻りをやったのち再び元通りの通送路に戻したが、ピストルの携帯が許された。

しかしピストルは持っていても冬季の午前四時五時の時刻は真暗い。鈴木青年の二の舞が起きないとは言えない。余程豪胆な男でないと勤まらない仕事だ。そこで見込まれた男が、徳山の太田二郎先生の父親だった。太田二郎先生の親父さんは意を決して、ヨシ、一つやってみよう、という事になってピストルを腰に行囊を背負って毎日洗沢へ往復した。

冬の早朝、真暗闇の深山を角燈提げての通送はさすが豪胆な太田先生の親父さんでも気気味悪かったと言う。十月のある朝だったという。細い山道をふさいで寝く居る大きな猪を見ておどろいた。よく眠って居るとみえて動かない。人一人しか通れない険しい山の細道だ。サア困った。眼をさまして突進して来たらやられてしまう。親父さんは意を決してピストルを一発撃ってみた。しかしビクとも動かない。もう一発撃ってみた。しかし動かない。こりゃ変だぞと怖る怖る近づいてみると、猪は血を流して死んで居ることが判った。「ハハア、こりゃどこかで鉄砲の玉をくらって、ここまで来て死んだのだ」と気がついてホット安心すると同時に、うまい拾いものだと喜んだ。

猪は素的な大物だった。親父さんは苦労して一先ず猪を木影へかくしておいて洗沢の交換所へ行った。帰路は猪と行囊をショイコへゆわい付けて塩之内へ帰った。猪は米一俵、六十キロ位の重量だった。帰宅した親父さんは通送の余徳と喜んで皮を剥ぎ肉は郵便局の人達から近隣親戚へ配って、猪鍋に舌つづみを打った所へ、二人の男がやって来た。

わしらは清沢の者だが、お前さんがひろって来た猪は実はわしらがウツ鉄砲で獲ったものだから肉を貰いたいと言うのだった。ウツ鉄砲で獣をとれば法規違反で罰せられるから二人の男も強い事は言えなかった。太田先生の親父さんも思いがけなく拾った物だから何とも

言えない。残念ながら残っている点を二人に渡して話はケリがついた。

猪に向って二発のピストルをうってから二、三ケ月後、太田の親父さんは拳銃発射に興味が出て、何か撃ってみたくてたまらなくなった。兎か狸が出たら撃ってみようと、毎日何か出てくれと念じて歩いたが何も出てくれない。とうとう我慢が出来なくなって或る日、木にとまって居るひよどりを撃ってみた。二発撃ってみたが当らなかった。

郵便局へ帰った親父さんは、「ピストルというものは当るものじゃない。」と話した。これを聞いて局長がびっくりした。猪を撃った時は拳銃使用の理由が成り立ったが、ひよどりでは理由にならない。弾丸を調べられたらとんでもないことになる。局長も青くなり、太田の親父さんも事の重大さに青くなった。早速局長は、陳謝と実弾補充のため横浜の総務庁へ出向いた。乗物は東海道に汽車があるだけ。四日間を費して局長は横浜へ行って来た。

後日となっては笑い話だがその時は局長が青くなり太田の親父さんは平身低頭ちぢみ上ったとのことだ。現代の逓送は郵便車だが、それでも強盗にねらわれる。金の運送は歩いた時代でも車の時代でも油断ができない。

この話は太田二郎先生から詳しく二回私は聞くことが出来た。最初は町史研究会で示城山へ登山した時、二回目は先生が静岡へ行くと言って下泉駅で電車を待って居る時、その時先生は私に「親父が逓送をやった若い時の話は、今は笑話だが、忘れられてしまう。原田さんが何かに書きとめて置いて下さらんか。」と言われた。

その日下泉駅から電車に乗られた先生は、日赤病院へ入院され再び郷里の土を踏むことは出来なかった。

「堀之内の郵便殺し」と言われた事件は、当時の電報の控から一切の記録が徳山郵便局に保管されている筈である。当時の郵便局長は、二十何年か前他界された有名な徳山の奈良間さんだった。

ふる里夜話第十話　終り

余録

『郵便行嚢逓送ノ際、郵便物ヲ掠奪シ、脚夫ヲ殺傷致候賊徒往々有之　公私通信ノ便ヲ妨ゲ様事ヲ泄シ不容儀ニ付　以後六連短銃何番合テ何挺御預ケ相成候然　夜雑昼雑ニ不拘右短銃ヲ一挺ヅツ脚夫ヘ可為携就テハ深ク郵便物ヲ保護被致候　御趣意ヲ相弁ヘ苟クモ凶器ヲ弄シ候様ノ所為有之候テハ不相済次第ニ付　最モ謹慎ヲ加ヘ取扱可申候　依テ左ノ規則ノ通リ相達候　相方共ハ勿論脚夫ヘモ厚ク申諭シ不取締無之様注意可致事。

但　短銃預リ証書ハ別紙雛形ノ通　相認メ証印ノ上当察ヘ可差出候事』

駅逓頭　前島密から取扱役に通達文書が発出された。

「郵便史話」より

いそがしい茶時に入ってしまい、ふる里通信の発行が又又おくれてしまいました。前回号の後すぐに、地下鉄サリン事件や、オウム真理教関係の報道が二ヶ月も続きました。

時間が止ってしまったかの様に思われた日々ですが、それでも春はめぐり野も山も新緑、花盛りの一番美しい季節となっています。

今年の桜の花は咲くのが遅かった上に、花数も少なくいつになくさみしい花見となりました。

桜の花が遅い年はお茶が良い"霜にあわない"との諺の様に、今年は良質のお茶が採れたと言うことです。それにしては、茶農家が元気がないのも気になるところです。原因は価格の安さか、それともお茶づかれか？

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　テ共　150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行（季刊誌）を予定しております。今回で購読の切れる方には郵便振替用紙を同封致しますから引き続きご購読をお願いします。

年間予約　600円（150円×4回）のご送金をおすすめしますが、3年分位（1,800円）でもお預かり申し上げます。

購読を止めたい時や住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

払込通知票　00870-4-81556
加入者名　中川根ふる里通信係
ふる里通信に関する問い合わせ先・及・発行責任者
428-03 静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
小沢節子
TEL 0547-56-0015

昨年の猛暑のおまけだったのか、今春のスギ、ヒノキの花粉の飛び方は本当にすごかったです。普通の年の百倍以上だとの見解もありましたが、長年観察してみても今年に勝るものはないと思います。スギは二月上旬～三月下旬まで、四月に入るとヒノキになります。スギは黄色、ヒノキは白色の花粉で、日中盛んに粉をまきちらします。京都の方で山火事通報で、消防署のヘリコプターが出動したが、花粉だったらしいとの報道がありましたが、実際山火事のけむりの様です。花粉アレルギーの人々のつらい日々は終りました。

スギ花粉 ↑
3月18日撮影
ヒノキ花粉
4月8日撮影 ↓

四季の里のパンフレットの住所が違っておりました。川根町ではなくて中川根町です。すみません。